

# 田代先生の追想

## 故 田代善太郎略歴

年代	年令	事	年代	年令	事
明治 5.	1	2.12日福島県東白河郡棚倉に生る。	同 13.	53	特に暖地性植物に付約3ヶ月に亘りて沖繩、奄美大島植物を調査す。
同 9.	5	母を喪う。	同 14.	54	京都大学理学部植物学教室嘱託となる。
同 16.	12	西白河郡久田野小学校卒業。	同 15.	55	汎太平洋学術会議のため「噴火と植物との関係につき」見学すべき箇所、別府、阿蘇、桜島、雲仙岳を郡場教授と共に調査す。
同 17.	13	父を喪う。	昭和 2.	56	聖上陛下奄美大島行幸の際、植物の生品及標本を天覧に供し「暖地性植物の分布」につき御前に於て説明を申し上げ。
同 21.	17	福島県師範学校入学、此年7月磐梯山爆裂す。当時福島県師範生は此地方にてキャンプ生活をなし恩師根本莞爾氏より植物研究の感化を受く。	同 3.	75	九州大学にて開催の第3回日本学術協会講演会に「九州植物地理概論」につき演説す。
同 30.3	26	東京高等師範学校卒業。	同 6.	60	近畿植物同好会採集指導をなす。堀幹事と共著大阪府植物誌成る。
同 30.4	26	福島県師範学校教諭となる。	同		兵庫県博物学会の顧問となり、植物調査指導をなす。
同 32.4	28	熊本県師範学校教諭となる。	同 16.	70	東京営林局の委嘱により房総、常磐地方管内国有林調査をなす。
同 35.4	31	長崎県高等女学校教諭となる。	同 17.	71	右同上、常磐地方各国有林植物分布調査をなす。
大正元年10	41	鹿児島県立加治木中学教諭となる。	同 18.	72	「日本本土に於ける暖地性植物の分布考察と遺稿」を発表せり。
同 3.	1	43	同 22.2	76	老衰のため逝く。
同 6.8	46	米国の木本研究家ウキルソン氏来訪、氏の希望により所蔵の標本、460点を寄贈す、該標本は米国アーノルド植物標本館に収納せらる。			
同 8.	48	鹿児島県大林区署の委嘱により霧島保護林に於ける植物の種類及分布情況調査をなす、又屋久島全島の保護林踏査をもなす。			
同 9.	49	内務省嘱託として鹿児島県の天然記念物を調査す。			
同 10.	50	大分県の天然記念物調査。			
同 11.	51	長崎県天然記念物調査。			

## 田代先生の植物標本と遺稿 広江美之助

田代善太郎先生の植物標本は京大の標本室に保管し、幾多の研究資料となつてゐる事は、枚挙につきないところである。こゝで御披露申し上げるのは、田代先生の遺稿についてである。田代先生は植物分類地理13巻に「日本本土に於ける暖地性植物の分布考察」とし

て、その業績の一部を発表されている。しかしこれ以外の田代先生の多くの資料が京大の標本室の一隅に保管されている。これが広く皆縁方に御利用されるよう御報知致します。なお最近田代孝子様の整理された「田代先生の旅行記」が早く出版される日を待つてゐます。

## 田代善太郎氏を偲ぶ

北 村 四 郎

昭和22年2月20日偉大な植物採集家、田代善太郎氏がかぞえ年76歳で永眠された。学問上御世話にあずかり、又親しかつた後輩の一人として其の伝を書く。

田代氏は真の教育者であつた。父は小学校長であつた。終生心の中の師は倫理学者、根本莞爾氏であつた。根本氏が福島師範に職を奉じていられた時に、其の生徒として教えを受けられたのがはじまりで、珍しい植物があると、常に博物館の根本氏の下へ送つていられた。今、国立科学博物館に、田代善太郎氏の多数の標本があるのは此の關係のものである。根本氏も亦、田代氏を終生深く慈しみ、いろいろ世話をされた。令息をあずかられたこともあつた。植物分類学上では、牧野富太郎博士に教えを受けられた事が多大である。これは九州の植物採集講習会に、田代氏等が主となつて、牧野博士を迎えられたのがはじめであつて、終生師事して居られた。牧野博士のもとへも多大の田代氏の標本が送られたのである。

京都大学との關係は、小泉先生が九州に採集され、鹿児島県の加治木の田代氏の家に立寄られたのがはじまりである。かねてより田代氏は、同郷(福島県)の小西重直博士と知合で、私淑して居られた。小西博士が京都大学に勤めて居られたので、一夏、京都大学の講習会に出席されたのも、京都に結ばれる心の縁となつたという。

大正14年1月より昭和15年3月まで、京都大学理学部植物学教室に嘱託として勤務された。主として標本庫建設に主力を注がれた(京都大学理学部植物学教室の標品庫の凡そ30万点の中で凡そ5万点は氏が採集されたもの、凡そ5万点は氏を通じて集められたものと見当をつけている。)昭和6年より学生の野外実習指導をして居られた。尙京都薬専の生徒の野外実習を永年に涉り指導して居られた。小泉先生は田代氏を九州より京都に招げられたのであつたが、常に田代氏の事を心配され、先生退職後も隣に住まれて常に「健じかつた。

田代氏は日本各地の植物同好会や、営林署の招きにに応じて各地に旅行され、其の地方の同好者に植物名を教え、将来の調査を依頼された。其の結果が多数の地方植物誌が田代氏の熱意と世話によつて出来上つて行つた。大阪府植物誌、長崎県植物誌、薩摩植物誌、南肥植物誌、福井県生物目録等氏の關係されたものは甚だ多い。

氏は一生を植物分類地理の实地調査に捧げられたといつても過言ではあるまい。最も九州に委しかつた。これは明治30年3月東京高等師範学校を卒業して明治32年4月より35年3月迄熊本県師範に奉職され、35年4月より大正元年9月迄長崎県立高等女学校に奉職された。此の間北九州を大いに採集された。牧野博士を招げられたのも此の頃である。故あつて長崎県高等女学校の教頭の職を辞し大正元年10月より大正10年3月迄鹿児島県立加治木中学校の嘱託として奉職された。尙大正9年3月より14年6月迄内務省天然記念物調査嘱託として鹿児島県で奉職された。小泉先生やウィルソンが訪問されたのは此の時代であつた。屋久島、奄美大島へも採集された。

京都大学に来られてからは、中国、近畿を主として踏査された。晩年に及んで北海道、樺太に採集されたが、之は主として小泉先生の筐の調査であつた。昭和18年植物採集旅行中福井県の今井長太郎氏の許で肺炎に罹られて以来植物採集には再起なく、戦時中は長野県に疎開された。昭和22年2月20日永眠された。御家族の話によると、意識不明になつても、云われる事は植物に關係あることのみで「之は何々という名である」と、野外実習をして居られる場面や「鶴町氏お上り下さい」とか「牧野先生一つ如何です」とか、何れも植物に關係のある方々に関する場面であつたという。氏は真の教育者であつて、その懇切な指導振り、熱意とは、思えば私などは冷汗三斗である。

凡そ氏が怒られた顔を知っている人は殆んどあるまい。又実に強気の人であつた。植物の名は一般によく知つて居られた。独りで広く何も彼も知つて、其の区別点や、分布迄聞けば立ちどころに委しかつたのは実に古来稀な人であつた。

兵庫県との關係を明かにしておく。これは氏が詳しい日記をつけておられるので、それから拾ひ出したものである。田代善太郎氏採集日記は夫人孝子さんが整理され1冊の本となつている。未出版であるが、広く同好の士に頒布したいものである。昭和2年7月3日竹田。昭和3年5月5日城崎：8月20日城崎来日岳。21—23日久美浜、氣比。昭和4年4月23日摩耶山：25日篠山永沢寺山：6月3日有馬：11月8日久美浜。昭和5年6月8日淡路島：9月7日姫路書写山：9月21日摩耶山。昭和6年6月1日揖保郡鷺籠山：8月17日姫路赤西谷音水：23日姫路法華山：10月11日雪彦山：

12月15日六甲山。昭和7年5月14日、15日有馬、三田：6月5日神戸野登山：6月12日能勢妙見：6月18日淡路常陸寺山：7月2日、4日姫路：8月17日書写山：8月19日妙見山：9月10日、11日赤穂郡上郡：17日但馬：18日姫路：23日加東郡光明寺山：松山血嶺。昭和8年4月22日多可郡千ヶ峯：6月25日六甲山：7月19日七種山。昭和9年5月20日赤穂郡有年村：27日老坂：8月16日篠山御岳：18日水上郡妙高山：19日高見城山：9月9日高仙寺山：11月26日豊岡。昭和10年4月14日上郡：9月29日丹生山。昭和11年11月8日城

崎。昭和12年5月15日、16日但馬：6月13日加古川：11月28日篠山。昭和14年6月28日千刈鎌倉谷：8月10日宍粟郡：11月23日神戸白川峠。昭和15年5月6日和田山、7日生野、8日出石、江原、9日金蔵寺山：9月23日武庫郡山田村。以上の如く兵庫県各地を踏査された。古い会員の方々の中には一緒に採集された日を思い出して下さるであろう。これは兵庫県だけであるが、日本を広く歩かれ特に九州はこの程度でないから恐れ入る次第である。

## 信州疎開のころの父

早春のやわらかな陽の光りが漸く庭の土をあたためて、秋に植えた草花がやがての春をまち兼ねるかのよう息ついて居る。柳の枝が芽吹き初めた。

柳の新芽を殊の外賞美した父、其父と共に曾つて暮した信州、塩尻村でのあけくれを思い浮べて、なつかしく其面影を偲ぶ。

昭和20年春、主人応召後幼児と二人主人の郷里に疎開していた私は京都の父母の身が案じられ再三ためて、漸くまず父とそうして研究資料とを疎開することになり、塩尻に父を迎えたのは終戦直前の7月であった。塩尻での父の日課は朝夕の散歩、資料の整理と書信をかく事であった。

どこの庭にもある、スグリ、グミ、クルミノキ、鈴なりの柿の実、附近の山の紅葉、さては千曲川の中にはさんで拡がる、小泉平等素朴な農村のたゞすまいが父にはよほど気に適つた模様であった。きびしい冬籠りの寒さを気づこうだが、案外元気であつた。

長野地方には幾種類もの大豆があるので、それ等の

## 北沢弓子(旧姓田代)

種類を集め、又柿、梅、杏、くるみ等の種子まで丹念に分類している「そんな種子まで集めて」と言つたら父は「いや種類によつて皆種子の形態が違うのだから」と箱に仕分けていた。

当時東京大学農学部も越後高田に疎開となつてをり、その教室の矢頭と云う人が時々高田から訪ねて来られ、父と村の附近の景観をみたり、又研究上の打合せもして居りました。父はこの冬ごもりの期間中に大体、多年堆積した膨大な資料の整理を了して最後の目標である「——」への総合的な腹案を練つて居た模様と察せられました。それは其折の父の日記を見てよそながら想像がつかます。父逝き春は幾度かめぐりきて、私たちの生活も今愛媛の松前に移り住む事となつた。

曾つて父が植物研究で交渉のあつた兵庫生物の御猪足あるを慶び、ますしき筆ながら父を偲ぶ心の一はしを記しました。

## 植物が泣くからZ・Tいわれる

田代先生が田舎の秋田に来られて植物採集指導をなされたのは2度あります。2度ともお供して僕の植物採集への情熱を湧かしてくれた恩人であります。僕の標品2000種の殆どが田代先生の同定を得たことによつて、図鑑も、目録も多少読み得る力ができたものだと考えています。全国にはさい分御指導を受けた採集家のいることであろうと人柄から想像に難くありません。

## 小林新

秋田に最初にこられたのは秋田師範が主催(日乃出先生が中心となる)されて当県で最も高い「胸ヶ岳」で採集会を開いた1936年昭和11年8月18,19,20日の3日間でした。以前にも秋田県に来られたようですが、北海道の帰りに秋田師範の村松七郎先生が案内して秋田市千秋公園を歩いたようなことをきいていますが、その頃は田代先生を知りませんでした。

先生に同伴して、植物分布ということに注意が向け

られ、その影響がやうと続いたことでしょう。最近の拙書「秋田県の植物」もまず水平的分布を中心にして所産植物を述べたわけであつたのかも知れないと思ひ出しています。駒ヶ岳の採集会で道々色々話されたことを思ひ出します。コミクリを水辺にみて、これは北方系、田代魁夫氏宅の庭園でこれはエゾスカシユリで北海道に多いものだとか、エンピセンノウを見て朝鮮のものらしいとか、クロバナノヒキオコシを指して裏日本要素の植物であるなどと語られたことが僕には印象深いことであります。

採集会などでよく見受けられることであるが、この度も先の方が植物を採つて、不要になるものがアキノキリンソウやゲンノシヨウコを捨てられたのです。ところが田代先生はそれを拾つて胡乱に納めている様子を見たのです。宿で腊葉を作るときでさえ拾つたようなそれを捨てずに腊葉にするのでした。僕が先生のラベルをかいて手伝つていましたら、ちよつとのぞき見て、「Z.Tをつけてくれ植物が泣くからね」といわれたのです。最初何を言つたのかわけがわからずにきゝ正したら会員の大釜松治氏が植物が泣くといわれたという。僕には感激深い思ひ出の言葉となつています。

宿で会員に研究課題として次のような問題を出して下さいました。

1. 露地に栽植せられ、若しくは鉢植にせられる植物の種類及其の量、防寒設備及び原産地
2. 河海地方に於ける注意すべき暖地性植物と河川地方に於ける暖地性植物の段階的分布  
(附) 羊歯植物の分布
3. 河海地方に於ける注意すべき暖地性植物
4. 裏日本帯植物要素の分布
5. 内土の平地及山岳地方に於ける南北要素の交錯
6. 各地方の植物目録及植物分布
7. 俗名調査、自然林調査

以上のことがらについていろいろ説明がありました。

駒ヶ岳の頂上コマクサ群落の見られる砂礫地をザックザック滑るように入る頃は夕日に映える鳥海山の美観にみとれていましたが、沢下りの足場の悪い下山道

にさしかゝる時分には日はとつぶり暮れてしまい、夏山の日暮の早いのに驚きました。田代先生が「急げ」といわれたのも無理はなかつたことです。日はとつぶり暮れて下山道は見えない。須藤巳代治氏と2人で先発となり、やつと国見温泉に辿り、僕は自炊し、須藤氏は出迎えに立つた。深合いで残つた10余名の会員は覺悟をして燃料を集め、夜明けを待つことにしたそうです。老体の田代先生の病勞を思うにつけ申し訳ないものでしたが、夜中の12時頃無事に温泉に揃つて夕食前の一杯は思ひ出多いことでした。田代先生は九州屋久島採集ではもつと難儀した話をして下さいました。

当山で明らかにされた従来の記録にないものはムシヤシオガマ(新称)をはじめ、ミヤマヘビノネコザ、オクヤマシダ、エゾアジサイ、エゾヤマハギ、ミヤマフタバムグラ、ナガエニワトコ、ミヤマツリガネニンジン、オオヨモギ、トビヒゴタイ、ネバリオオノアザミ、ウゴアザミ、コヤブタバコ、オオモミツハグマ、クモマニガナ、キタヨシ、エゾギボウシ、エゾスカシユリ、ヒメフタバラン、ケトダシバなどありました。

駒ヶ岳の帰途拙宅に一泊された折りに標品を見ていたとき、各大学の分類専攻学者を紹介していたとき、菊科、禾本科、莎草科、單子葉、羊歯類、柳科の専門家のいることを始めて知り、大いに研究の能率が上つたものです。

先生の朝起の早いには驚きました。第2回目の同伴は昭和13年8月で、日本海岸の岩館村を中心とした採集会でしたが、旅籠屋に泊り、翌朝会員の目覺めた頃にはもう附近を一巡して手には沢山の採集植物を持つて、ニコニコしてこられた先生と朝の挨拶をかわし、先生は「モクゲンツの自生」が見つかつたと話され、大変面白い植物あるよというわけで、大いに勇んだ朝の出立でありました。先生の身体には病氣というものはないものゝ如くに思はせられていたものです。なき先生が偲ばれてなりません。

終りに先生との間に手紙の往復がかなりあつた間に、これは植物と関係のない人物調査の依頼があります。人物の評判から性行概評行動の記録をしらべてお届けして大へんよろこばれたようでした。

(1952, 2, 2. 記)

## 百舌欄

- ①室井紳への通信 室井編集子宛の通信は必ず、神戸市長田区寺池町1丁目、県立兵庫高校として下さい。万一、兵庫区兵庫高校とすると兵庫区の市立兵庫高校か又は兵庫区の市立工高に行き、ぐるぐる廻る中に紛失してしまいますから御用心願います。打電の時はムロイヒロシが正しいと聞いていますが、タク、シヤク、ムダ、アヤシ、ユクカ、ヒロム其他、何んでもよろしいとか。(大浦茂樹)
- ②2巻3号発行 3号は明年早々に出版したいと存じますから、年末までに原稿送付をお願いします。次号から、県内動植物誌資料を募集しますから短報をどしどし御寄せ下さい。(編集子)
- ③百舌欄募集 本誌附録として会員名簿を出版しました。各支部毎に1番から5番までの方は必ず百舌欄の記事を御寄せ下さい。(編集子)

## 田代様を偲びて

三 木 茂

分布の事実とその原因を知り度いと御希望が多分に見受けられた。此の点は自分にも共通した点であるので、この方面を専心研究されていた田代様の名声を時々承つていた。大正12年の夏、当時京都大学の植物で同じ学生であつた現在農学部教授である今村駿一郎博士と鹿児島に採集旅行の途、加治木中学に奉職されていた田代先生に色々九州の植物の状況に就いて、御話を承りたいと思ひ加治木に下車訪問した。夏休みであつたので奄美大島に採集に御出になつた留守中で残念ながら引揚げた。数年後桃谷頤天堂が田代様の標本を買入れ、之を京都大学に寄贈した為、之の整理に京都大学に御出になつた。

其の後大東亞戦争で私が南洋に参る迄の拾数年間公私御世話になつた。終戦後復員したが会う機会もない内に他界された次第である。

この間珍らしく感じたことは、田代様が或る時希望社の雑誌を配布されていたのを見たことである。希望社との関係は直接御本人から承つたのではないが、長崎県の女学校に20年近く奉職の際、後藤静香さんと一緒だつたので希望社の主旨に共鳴されていたとのこと

を承つた。時々植物の名称をお尋ねすると、それは何処から何処まで分布するのであるとノートを開べて教えられた。その材料は地方の方々を指導し、その上で調べあげた貴重な材料によつたのは勿論である。

我が国の分布の状況が漸次判明してゆくのを常に無限の喜びとされていた様に見受けられた。自然を愛される方には変人も多いのに、その様な点が全くなく寡言にして温厚であつたのは教育者で且希望社の愛の精神に徹して居られたことによる様に思う。この完成した人格が凡ての繁忙をもとせす、地方の人々を指導された原動力となつていたと察せられる。従つて物質的方面は知らないが、精神的には自然研究の醍醐味を味い、之に全精力を打込むことの出来た幸福の人であつた。他方田代様の大きな業績は当時正確な図鑑の乏しい時代に正確な植物名を地方の人々に普及し、後進を指導されたことにあり、又小泉先生のもとで京都大学の腊葉標本を整理し、その完備に尽力されたことにある。この2点に特に敬意を表しつゝ先輩の靈にこの拙文を捧ぐ。(昭和27年1月17日)

## 田代先生と私

室 井 綽

私の少年時代、今から丁度20年前の19才の夏休暇中に新聞紙上で田代善太郎先生指導で17日に書写山で植物採集会、18日標本鑑定会が開かれることを知つた。同時に兵庫県博物学会のあることを知つた。私はそれまで折にふれて集めた標本が石炭箱に1杯余り貯つていた。時々牧野先生の日本植物図鑑や村越氏のもので一応見当をつけていたが、どうしても自信が持てないそこへ新聞で田代先生の实地指導の記事や標本鑑定会が開かれることを見たので、早速恩師片倉恵先生に紹介もなしに誰一人知らない私が田代先生に御願して果して鑑定して下さいかどうか御相談して見たところ、「思案するより、ぶつかつて見よ」と云うことになり、16日夕に郷里、有年を発つて従兄の姫路の宅に泊めて貰うことにした。

初めて都会に泊つたうれしさと、何年も望んだ植物の实地指導を受ける楽しさが交錯して、どうしても

ゆつくり寝られず、5時には目が覚め皆さんより、1時間も早く現地に着いた。

書写山麓で見知らぬ方ばかり50余名も集つた、最初に姫路師範の西本俊雄先生が何時もの温和な顔で田代先生を紹介され、田代先生も亦、笑顔で、何回でも遠慮しないで尋ねて欲しい等と云う意味の親切丁寧な挨拶をされたので郷里から担いで来た標本のこと等思い出し、占めたと云う予感がしてうれしかつた。その日は手当り次第に引き抜いて田代先生に御尋ねしてテープに名をつけて、胴乱に詰め込んだ。その時は大きい胴乱に3杯も野冊に入れたから今から思つても随分採集したものであつた。山頂の堂前で昼食をとつたが、食事を早く終えて、附近で手当り次第に採集して食事の先生に尋ねて胴乱に詰めた。この時にナガバジユズネノキ、イロハモミジ、イヌビエ、シラガゴケ、カフトゴケ、イヌタデ等は覺えた名である。後

日、羊歯の田川博士に承つたことであるが、田川先生も、この会に御参加された由で、先生はまだ三高在学中で京都駅を1番汽車に乗られるために深夜下宿から、1間時余りも歩いて京都駅に出られたとのことであつた。

その後、色々の縁があつて3回もこの山に採集に参つた。その都度、思い出の同じコースを登ることにして、ありし日の田代先生と私の運命の決つたこの山をなつかしく思い出したのである。

その晩は古新聞を買つて来て標本の黻を申し乍ら何回か復習した。

翌18日、8時に親戚を出てカンカン照る坊主町でバスと別れて、汗をかき乍ら、田代先生に御願ひして見た。先生は生徒の私の願を早速いれて下さつて、みて戴くことが出来た。丁度折よく私の採集品中に先生が何年も探し求めていられたコヤスノキがあつたので、私の名まで先生に知つて戴き先生から分布を確めるように命ぜられた。この最初に私の採つた土地が赤穂郡赤松村岩木大避神社で、昭和8年天然記念物に指定された。その外にチトセカツラ、ナツアサドリ等と云う珍品の良標本が私の持参品中にあつたので乞われるままに先生に差し上げた。そして現地の状況を折返し、京大の同先生宛に御知らせしたところ、今度は先生の方から、一度行き度いから案内せよとの御知らせを受けた。当時、上郡農学校の校長岡田芳穂先生、教頭の片倉恵先生、林科の別所久雄先生等からいろいろ御助言を賜り、別所先生は田代先生を御迎えする経費の全部を負担して下さいました。それで同年9月9日、赤穂郡

上郡町に先生を御迎えすることが出来た。翌10日、自動車で別所先生、西本先生、先輩の宮崎高農生山中岩一氏と小生の5人で赤穂県最高峰、三濃山に登山したのであつた。この日も私は一生懸命採集して名札をつけた。その後、先生との親密の度は一層加えられて、毎週不明の標本は腊葉にして先生へ送付した。先生は何時も折返し御返事を賜るので1年位で大底のものは判る様になつたのである。

その後、私は農学校卒業と同時に文検を受けることに決めて郷里、有年小学校に代用教員として勤め乍ら好きな植物採集に全力を注いだのであつた。其の後先生の御助言御誘導もあつて、竹の内田博士の居られる盛岡高農へ進学を決したのであつた。先生はひどく私の入試を御心配下さつて、京都の受験地では、わざわざ出張した某教授に御会い下さつたり、学校の某教授に添書き下さつたり、受験当日は先生の宅に泊めて下さつて口頭試問の諸注意を受ける等一方ならぬ御世話になつたものであつた。盛岡から入学の電報が入つた時など、早速電報を先生へ打つたところ、先生は君から知らせの3日前に入学が確であるとの報を得ていたと云う意味の御葉書を戴いた。

盛岡在学中も、附近の岩手山、姫神山、早池峰山等に登り、未知の植物を採集しては先生に送り御指導を受けたものであつた。この年まで面白く先生と同じ道を歩くことの出来るのも、私の採集狂の少年時代に折よく採集会鑑定会に巡り会わせて戴いた幸を喜ぶと共に、田代先生の御指導の賜と何時も感謝し乍ら植物採集の道業に及ばず乍ら努力している次第である。

## 私の少年時代の思い出

田代晃二

父の鹿児島時代あの南九州鹿児島のカンカン照りの、輝しぐれの、広い屋敷の庭一ぱい並べ干されている取紙の光景がある。500枚もの紙を並べ押えに棒をわたし、石をおき表が乾いたら裏を返す、裏が乾けば、日が傾かぬうちに急いで取り入れるこれが私達の日課であつた。それに続いてなやまされたのは押葉づくりのお相手である。父の前に座り取紙を2枚3枚と指図によつて父に渡すことなのである。遊びぼうけることの許されない故うらめしく思うこともあつた。簡単なことの様であるが大変な行であつた。

家庭に於ける父

こと学問に関してはまことに厳しい父であつたが、家庭的には寛大な父であつた。家族それぞれの人格自

由を重んじ、決して意見を強いるような事はなかつた。

毎日数十通の手紙を書き、標本と調査の整理をしていた父には暇というもののある筈はなかつたが、時折夜分など山行の靴下をつくらつて居た、これは仕事をつめ過ぎたあとの頭休めであつたということである。

父の几帳面

植物に関する研究資料の整理保存は当然のことながら、記念すべき社会面の新聞や号外、公私の手紙類をも漏らさず保存されて居る。私達がつかい古したノート類、いつの間にか手元をはなした様なものでも父のところにはちゃんと保護されている。父はその余白や裏を利用して植物のことを書いて居る、いつどうして父

のところに行くのか今でも不思議に思っている。

ものを大事にし、一寸の紙ぎれでも捨てず便利なものが出来ても、新しいものはめつたに使わなかつた、私達に小包の紐を解かせるのにも鋏を使わせなかつた。

父は人を愛し愛された。

人を批評したり攻撃したりなど、ついで聞いたことがない。人との交際に於ても、学問上でも、その他でも、縁あつてつきあつた限り、その交りに態度を変える様なことはなかつた。たとえ他から中傷の言葉を聞いても、

「友はめつたなことで棄てるものでないぞ」

私のある交際の成行を察した父は珍らしく、こう訓した。それから10年を経た今日、父の言葉を味わい深く

思っている。

今年も春が間もなくやってくる。

柳の芽と共に、

「疎水の柳の芽がふくらんできたよ、とても、美しかつたよ」

父は柳の芽ぶきをことさら喜んで、よく岡崎方面まで散歩の足を伸した。

父にとつては、柳の芽ぶきは、植物の精が春風に托して送る招きの第一信であつたのであろう。

父にお伴しての採集行の数々は懐しい。私は父の期待に添えず、植物には遂に進まなかつた。しかし、父の教えてくれた「山歩きの用意とコツとねばり」これだけは、私の道に於て生かさねばならぬと思つている。(昭和27. 1. 30 記)

## あ と 十 年 田 代 孝 子

「植物地理」の研究という大仕事と取つくだ父にとつては、76才の齢も短い生涯であつたと言えよう。

「十年ひと仕事」と世間では、普通言つてゐるが、その10年をいくつも重ねて、なお足りない仕事を、父は、こつこつと続けていた。

「お父さんの研究は、いつ、まとまるの？ あと何年かかるの？」

「そうだな、あと10年」

10年たつた。

「お父さん、まだ出来ないの？」

「うん、まだ」

「あと何年？」

「そうだな、あと10年」

こんな会話が、家で、母や私たち子供と父との間に何回となく交された。しまいには、私たちの方が根負けして、あまり言い出さなくなつた。

未完成ながらも、自分の歩いた道について、その時、その時の中間報告を発表して後に、しつかりまとめ上げる、という風にできないものか、こう思つて、父に申入れたことも一再ならずあつたが、そんな器用なことは、父には出来ないことであつた。

「お父さんは、百までも生きられるつもりで仕事をしたいられる様に見えるけれど、そんな自信があるの？」

父はニコニコ笑うだけで何も言わないのが常であつた。

父の仕事の価値と困難さとは、私たちにも漸くいくらか解つては来たが、学問の世界であるだけに、素養

のない私たちには、これという手伝いもできず、どうしようもなかつた。

「お父さんおひとりでは無理ではありませんか？ 同じ道を歩こうというお弟子の方々に、それぞれの区域を受もつてもらつて、一定の方針で調べにかかつて頂いては如何です。5ヶ年計画、或は10ヶ年計画という風に、はつきり、きりをつけて結果を出す様に方針をお立てになつては？」

父の健康を信じ切つていた私たちではあつたが、停年で大学の教室を退き、古稀の祝いをして頂きなどして、父の齢が、もはや、古来稀なりとされる峠にかつたことを知つては、氣遣わずにはいられなかつた。

殊に、昭和18年5月、福井県三方郡の旅先で大病を患い、危い命を捨つてからは、口を酸くして父に申入れた。

「お父さん、これからは、いままでとは逆に仕事をして下さい。先ず遺言を書いて、研究資料の処置についても指示しておいて下さい。それから、資料を他の人がしてもわかる様に分類しておいて下さい。その上で、命の許される限りの研究を続けて下さい。」

この願ひだけは、父もかなり受け入れてくれた様である。

植物地理は、植物分類の眼がかなり確かになつたその上で、実地に其地域の調査をしなければ明かにならない、大仕事である。

76才——世間的には長寿と言われる齢も、父には短かつた。

幾春秋、幾山河を歩いた父として自らの眼に映じた植物分布の姿を自らの手でまとめて後進の人に残したかったであろうことを思えば残念である。

#### 1. 採集日誌。

父は20才から晩年まで1日も欠かさず日誌を書いた。新聞面の感想から、家事と共に書込んでいる日誌だから採集に関する面とても簡潔なものであるが、採集記事だけ拾い出してみると、足跡が誤りなく浮び上つて来るし、共に歩いた人々も明かになつて来る。又、記された植物名は、何らかの意味で注目すべきものとして記した父のメモである。又、同じ地へ、数年間、或は同じ季節に数回足を運んでいる場合には、花を調べよう、実を調べようとしてその時期をねらつた意図も読みとれるのである。

#### 1. 論文

父の筆になる論文としては次の2つがある。昭和3年「九州植物地理概論」と先の大病後、昭和18年11月、小泉源一先生遺稿記念論文集に収められたもので

「日本本土に於ける暖地性植物の分布考察」という論文である。

生前、自らを語ることのなかつた父であるが、父の残したこれらのものによつて、父は永く後々の人々に呼びかけるであろう。

なお、父が各地に植物同好の士を数多く育てたことも父の業績のうちに数えさせて頂いてよいであろう。日本中、どこを歩いても、お弟子たちに歓迎され、宿に困らない父であつた。

#### 草を褥に

##### 草を褥に

##### 木の根を枕

##### 花を恋して50年

これは、父がまだ盛んな九州時代阿蘇山採集の折山中の宿で、牧野富太郎博士が父に書いて下すつた扇面の言葉である。

大正11年8月、久住山大採集会に、当時中学生であつた私は女子大学の姉と共に父のお伴をして旅行に加わつていた。九州各地から、夏休みを利用して馳せ参じた植物講習会員は、150名にもものぼる大集団であつた。

久住山を中心として、附近の山野を、1週間にわたり、毎日平均7里の行程で歩き廻つた。

指導役は、牧野富太郎並びに田代善太郎ということにはなつていたのであるが、さて宿を出て山にかかる時、牧野先生は、講習員150名をもつているなど、いつのまにか、お忘れになつたらしい、半丁行つては立

止り、1丁行つては立止り、あの草、この枝、ためつ、すがめつ、丁寧に折取つては、どうらんにも収めてゆかれる。

朝の出で立ち暫くの間は、牧野先生や私の父を囲んで何かと熱心に学ぼうとしていた講習員たちも、何せあまりに人数が多いのと、先生たちが、あまりにのろいので、しまいには根負け暑さ負けしてくる。そこで、先生たちをおいてけぼりにしてさつさと目的の山へ登り、谷へ降り、予定地の宿へ着いてしまう。お弟子たちが一風呂を浴びて、或はビールを傾け、蕎麦を打つている、そこへ、2、3時間もおくれて、すつかり暗くなつた山宿へたどりつく、というのが常であつた。

当時まだ身体もたつしやで足も速かつた父は、1番しんがりの牧野先生と、それから1行のうちかなり熱心な連中のいる後半部隊、この間を幾度も往復しては、講習員の指導もし牧野先生の採集お手伝いもしていた。

夕食のすんだあとは、さながら戦場であつた。宿の部屋という部屋には、どうらんが、いつせいに口を開いて、その日の採集品をばき出す。枝を折る音、紙の音。

「これは何だつけ？」

「それはあれだろう！」

「いや違う！先生は、たしか、何とおつしやつた」

「そうかな、じゃあ、確かめて来る」

で、人の背中と、どうらんをまたいで、実物をもつて父たちに聞きただしに来る。

父は、自分の採集品の整理がはかどらないことなど苦にしないで熱心に応待していた。講習員たちがつかれて、仕事をいいかげんに切りあげて休んだあとの静かな夜更け、父と牧野先生は黙々として、採集品を整理し、脂葉にしていた。

父たちが時折交す短かな言葉のほかは、谷川の音がひびくばかり。寝苦しい山の宿も、11時頃になれば、さすがに涼しくなつて、いつともなく私は寝入つた。かなり寝入つたと思われる頃、ふと眼のさめた私は父たちの方を見た。父たちはまだ整理をつづけている。父たちがいつ寝むのか、1週間の旅行の間、遂に私は知らなかつた。

#### 夢は枯野を

「これから出かけるからね、母さん、支度を！」

「ここは何処だ？米原はまだか？」

父は病床にあつて、夢幻の間にも旅行していた。一生を植物分布地理という大仕事に捧げて山から山を歩いた父には当然のことであつたらうが、私たちは傷ましいことにも思つた。



先年、福井の旅先で急性肺炎にたおれた時もそうであつた。高熱のつづいたあと、暫くは、夢遊状態であつた。一命は取止めても果して正しい状態に戻るかと氣遣われたぐらいであつた。

その様な状態にあつても、無理も言わず、苦しみも訴えず、もつぱら採集を続けているらしく、「ほほう、ここに、こんなものがありましたよ」と、こうもり傘の柄をさしのべて、枝を引き寄せる様なしぐさをする事も屢々あつた。

そういう容体の時でも、病床を見舞うお弟子に対しては不思議と正気になり、頭を向けて、にこやかに会釈し、すぐに研究の相談を始める、言葉も乱れず、その内容には誤りはない様であつた。

病漸くいて、福井から京都へ帰り、ひたすら静養につとめていたが、戦争が次第に切迫して来た。万一をおもんばかつて、信州塩尻に疎開してもらつた。父はその間、資料の整理を行つた。

昭和21年春、信州から京都へ帰つた。その7月に、戦後初めて開かれた京都大学植物地理学会に出席、久かたぶりに旧知の人々に会つて父は大へん喜んでいて、間もなく再び病床につく身となつた。

初秋の頃の気分がいい、頭のハッキリした朝、父は言つた。

「昔のお坊さんなどには、生きていうちから最後の場合の覚悟の立派にできていた人が多いことを聞いているが、わたしはまだ出来ていない。」

父は、自分の目標ばかりを一心に迫っていたので、自分の齡の加わつたことは、これまであまり氣に留めていながつた様であるが、恢復のはかばかしくないことを漸く認めて、来し方、行く末を思い、ひとり何ものかと戦つていた様である。というのも、われわれの想像であつて、ふだんから、自分の苦痛や不平を他に漏らすことのたゞ1度もなかつた父は、病の床についてからも、その様なことはついぞ漏らさなかつた。

研究資料の処置についても、自分からは言ひ出さなかつた。

ある日、枕辺近く坐つた私に向つて、父はしきりに物言いたげな様子であつたので、顔を近すけると、父は、ぼつりぼつり語り出した。それを綴つてみるとうである。

「私も若い時は熱心に分類をやつた。しかし、分類には、あまり力を注ぐ氣にはなれなかつた。植物研究をする者の殆んど皆が分類にかかつていのであるが、みんながみんな、あんなことでいいものだろうか？ 私は分布をやろう！ こう思つた。

そうして、それには、各地域々々でひとまず考察して、それを大局から見る、という風にやれば良から

う、こう思つた。

だが、やりかけてみると、各地域々々を考察するには、その外廻りが解つていないといけないうことから、段々と研究が掘げられることになつた。そうして、私ひとりの力では到底ゆかぬ大きな仕事となつた。

いまでは、こう思つている。

若い人たちは、一応、分類を熱心にやるのが良からう。またやらねばならぬ。その上である人は、分布に進んでもらいたい。」

父の言葉足らずの上に、私の聞き違いもあろうかとおそれるが、父は上の様な意味のことを述べた。

夢現の状態の時であつても、こと植物についての話となると正しい返事をしていた様であるから。右の言葉も、父がかなり衰弱してから述べたものではあるが、かねて語らなかつた自分の心境を残したものかと思われる。

父の最後は安らかであつた様である。

発病以来、小1年、自然に加わる衰弱のほかは、これという急な悪化もなかつた。しかし、父の息使いの模様から、或は最後の別れとなるかも知れぬ、そう思うと私は旅立ちをためらつた。日本海の漁村調査に2泊の出張を仰せつかつていたのである。同行者もあり、既に出先各方面に手配もしてある。こと故、私は神に念じて立つことにした。その折も父は、いつもの様に、床の中からやや頭を上げ、=ツヨリ会釈した。

2月19日、用向を果して漁村の小さな宿に泊つた。

外は5尺の雪、しんしんと冷えて寝つかれぬ夜であつた。

2月20日の早朝「放送局の方にお電話です」と女中が呼びに来た。

「こちらは伊根の郵便局ですが、あなた宛の電報が入つておりますのでお伝え致します。本文を申し上げます。……」

2、3日来降りつづいている雪は、今朝ははや6尺に近い積りとなつた。

空も、海も、港の家々も、いちめん雪で清められた中を、父は昇天するであろう。かもめが、しきりに雪の海をとぶ。

### 若き日の父

幼き日の父は孤独であつた。

父がその親、つまりわれわれの祖父に死別したのは13才であつたという。生母はまたこれより先、父の5才の時に、妹を生んで亡くなつたので、あとは継母に育てられたのであるが、継母も早く世を去り、妹も小さいうちに亡くなつたという。その後の父は親戚に預けられて育つた。

父の家は、代々學者であつたらしい。曾祖父のことを記した大きな石碑が、谷文晁の筆で福島県白河公園の一隅に建っているのを、父と共に訪れたことがある。

父は、父母や亡くした子供たちの命日を決して忘れず、その日は、ふだん買物などせぬ父が、自ら、何か供養のもの、菓子果物など買い来て、われわれに与え、父母を語り、故郷を語つた。

しかし、ふだんの父は、宗教的なことには無関心な様な印象をわれわれに与えていた。ある時、私は聞いてみた。

「うちには宗教はないの？」

「うちは禅宗だ」

「お父さんは、しかし、信心はないのね」

「そうだな、しかし、それにはわけがある。お父さんは小さい時に両親を失つたので、小さい時から佛壇と位牌を持たされた。毎日、淋しいものだから、その前にばかり座つていた。それを伯母たちが見て心配した。この子はあんまり佛さまに親しみすぎていけない、佛壇は預かるう、ということになって、取上げられしまつた。その佛壇は未だに親戚に預つてもらつてある」

小学校を卒えた後、父は漢学塾と英学塾とに学んで、次に師範学校へ入つた。

福島尋常師範を卒業した父は、田舎で小学校の校長

を1年間つとめた。月俸8円であつたという「豆腐屋の2階に下宿してたんだが毎日豆腐ばかり喰わされたのには閉口したね」と笑いながら話してくれたことがあつた。

この間勉強した父は、先輩を頼つて、東京へ出て、東京高等師範へ入学した。夏目漱石が教えに来ていた時代で、漱石にも英語を習つたそうだ。

さて、後年の父には想像できないことであるが、當時の父は政治家にならうという志も相当なものであつたらしい。政治運動に興味をもつたばかりでなく、実践にも携つた。即ち河野ヒロナカの演説応援に出かけた。これが学校に知れた。政治は御法度の高等師範で、学生にあるまじきこと、問題になつた。遂に職員会議は、父の退学を命ずることに決つた。

当時の校長は、後に講道館柔道で有名な加納治五郎先生、先生は最後の一決で、

「田代は植物が好きだから、選科に残してやれ」  
加納校長の温気で選科に残ることになつた。これが、父の一生を彩る植物研究へと専心する様になつた動機だという。

父の若き日の政始への情熱、それは後年表面には現われなかつたが、しかし日誌には政界の動きが、簡単ながら常に記され、又、選挙に極めて熱心で、棄権などすることは決してなかつたことを想えば、うかがわれないでもなかつたが。

## 父を思う

## 田代泰子

父逝きて5年、2月20日の命日が近づくにつれ、みぞれ降る日も粉雪ちらつく日も、看とりしながらひたすら春を待ちつゝ、過ぎて居たあの日の事が偲ばれる。

母と二人せめてもう10年生きて欲しいと切に望み、父の少しでもよろこぶ様や良い方に向う様子を何よりの喜びとして看まもつて居た。父は病中誠に穏やかで、お早う、ごちそうさま、の会話は変らず、食事を工夫してすゝめる事が楽しみでもあり張合いでもあつた。父は又再起を信じ早く治つて「みんなの人の為につくさねばならぬ」と答えるのが常であつた。だんだん衰弱が加わるにつれ眠る時間が多くなつたが、魂はもはや夢現の境を越えて、山野の旅をつゞけ、覺めては汽車の時間のこと、植物の問答を口にしていた。

亡くなる前日の夕刻「大変お悪い状態です」と家人に告げられた医師の言葉が眠つていた父の耳に入

り、  
「それでは私はどうすればよろしいですか」と医師にたずね「静かにおやすみになるのが一番およろしいです」との答えに、にこやかにうなずき「いやどうも有りがとう」と会釈をし、それから母のすゝめる牛乳を飲み、眠りにつき1時間後には永久の別れとなつた。

一番末に生れ私は父の活動の盛んな時代は知らず、晩年の慈悲深いまなざしと優しい温情の面影が私の心永久に生きています。

「静かなるしあはせに居て父心われと

桃を食うべぬほの紅き実を」

私はいつも心の父に、あいさつをおくり、わが行く道を祈つて居る。

故田代善太郎先生追悼号の発刊に当りこの拙文を御生前御懇篤なる御指導に浴した先生に捧げ多年の学恩に酬いたいと思う。

先生は福島県の御出身で東京高等師範学校御卒業後長年九州に在つて西南日本特に九州植物の探究に絶大なる御努力をなされた。大正14年九州を去つて京都大学理学部植物学教室に勤務されたが、先生多年の採集標本は桃谷順一氏によつて植物学教室標本庫に寄贈され、フォーリー師の大採集品と共に設立間なき同標本庫に一大光彩を与えた。先生は植物研究上の知己を多く有せられ、京大に入られた後も検定を求めて送付する標本多く、又各地の採集会を指導し多くの標本を採集され、これらを悉く標本庫に入れられたので、おびただしい標本が先生によつて直接間接京大に集り、京大植物学教室標本庫の充実には大きな功献をされた。かくて其後は西南日本のみならず全国各地を旅行して特に暖地性植物の分布地理研究に努められたが、その一端は「日本本土に於ける暖地性植物の分布考察」として植物分類地理第13巻小泉教授還暦記念号に発表された。この間先生の採集によつて新しく学界に知られた新種も多数にのほり小泉教授をはじめ大井、北村、田川諸先生によつて研究発表された。

我が兵庫縣と先生の関係は京大に入られた後のことに屬する。兵庫縣にあつては従来明治20年頃から西播に大上宇市氏があり、揖保、宍粟兩郡を中心に研究し、淡路には明治後期以後松沢重太郎氏が主として南部方面を探究し、大正に入り東播に松島克生氏が小野町を中心に調査をすゝめ、又姫路師範学校坂本長藏氏は但馬妙見山、御影師範学校山鳥吉五郎氏は六甲山系の精査を以て著名であつたが、相互に研究上の提携い少く孤立的な感あり、且つ研究範囲も局部的であつた。それが大正後期に至り神戸博物学会の誕生あり、先生は大正14年5月同会の招きにより摩耶山採集会を指導されたが、この採集会は先生と兵庫縣とを結びつけた記念すべき会合であつた。先生よかねて兵庫縣植物調査の希望を有せられたが、この会合に於てその御希望を述べ且つその帰途コヤスノキ採集の目的を以て揖保郡香島村に大上氏を訪ね一泊の上氏の研究物を見て宍粟郡の植物の有望なることを知られた。コヤスノキは大上氏発見当時(明治32年)牧野博士によつて発表され、その後タキミンダ、リュウキユウコザクラ、イワヤシダ、ホンゴウソウ等分布上興味ある植物が次々

大上氏により報告されたことによつて、大上氏を訪ねコヤスノキの自生を見且つ西播の植物分布を知りたいき意図を持たれ吉野善介氏(備中植物誌の著者)の紹介を受けこの機会に実現されたもので、大上氏自筆略伝にもこのことが記され、吉野氏の紹介状、先生の礼状は共に大上氏遺品中に現存している。

この大山氏御訪問には坂本長藏氏の但馬妙見山植物研究を知られた副産物あり、後姫路師範学校を訪ね坂本氏蒐集の標本を調べ妙見山植物調査の有望なるを知られた先生は昭和2年妙見山採集を行われた。なお姫路訪問の際には阿部良平、西本俊雄両氏の案内により姫山樹林の調査をされた。妙見山採集の案内をされたのは大正14年摩耶山採集会の際相識られた氷上郡の岸野岩三郎氏であつたが、同氏を通じ福知山地方との交渉が起り丹波博物会の誕生となり先生の足跡は但馬方面にも及ぶことゝなつた。又同会に屬し植物研究を始め三丹(丹後、丹波、但馬)植物に精通された荒木英一氏は直接本県とは関係なきも但馬及び多紀、氷上兩郡にもしばしば採集し、氏の採集品によつて命名記載された兵庫縣を原産地とする新種もあり、分布上の貴重なる発見もあつて、兵庫縣植物研究上、氏の功献は大なるものがある。又和田山町在住の田口美智太郎氏その他2、3の人に但馬植物調査の端緒を与えられ、氏は後に但馬植物目録を発表した。

以上は大正晩年、昭和初頭に於ける先生と兵庫縣の関係であるが、昭和5年兵庫縣博物学会が成立し今後は同会の採集会を指導されて広く植物の豊産地を歩かれると共に多くの採集家を養成された。

同会が初めて先生を招いたのは昭和6年竜野鷄籠山に於ける採集会で、その後昭和14年8月宍粟郡船越山採集会までの9年間に播磨では宍粟郡音水、赤西国有林、富栖村、船越山、飾磨郡書写山、雪彦山、神崎郡七種山、寺前村、香呂村、揖保郡鷄籠山、赤穂郡生島、赤松村、鞍居村、三澁山、印南郡石の宝殿、加西郡法華山、加東郡清水山、光明寺山、多可郡千ヶ峯、加古、加東兩郡の加古川河畔、但馬では朝来郡段ヶ峯、城崎郡玄武洞、網卷山、美方郡余部村、養父郡妙見山、丹波では多紀郡小金嶽、高仙寺山、福住村、氷上郡高見城山、妙高山、三国岳、篠ヶ峯、粟鹿山、及び多紀郡大山村から鐘ヶ坂を経て氷上郡柏原町に至る間、摂津では有馬郡相野古市間、淡路では常陸寺山、猪鼻谷、三熊山、等の採集会を指導され、又単独採集

されたこともあり、これら採集会の成果は採集記、植物目録として毎号会誌に発表され本県植物研究の貴重な文献となつた。

又この間先生の指導を受けた人は多数あるが特に但馬朝来郡の川中菊市、丹波水上郡の細見末男、多紀郡の樋口繁一、摂津有馬郡の小早川利次、播磨赤穂郡の室井紳、加東郡の稲田又男、山口清司諸氏及び宍粟郡の筆者は先生指導のもとに該地方のフロアの探究を行い、室井氏の「赤穂の植物」川中氏の「但馬植物目録」小早川氏の「有馬郡の植物概観」樋口氏の「多紀郡植物目録」山口氏の「加東郡野外植物目録」稲田氏の「兵庫県下のウラボシ科」建部の「宍粟郡植物目録第一輯」「船越山植物小誌」等の研究発表があり、新種植物、分布上興味ある植物もかなり判明した。

一方各地採集会の成果を集成し全県下に及ぼすべき先生の御意見により、先ず最も調査のすんだ播磨から着手することとなり、先生御指導のもとに室井紳氏の編輯した「播磨植物目録」が昭和10年に発行された。本目録には大上氏の目録が加えられ、且つ室井氏も記す如く早急になつた関係上修正すべき点があつたので、筆者在京中先生は目録を検して修正されこれを一々口授記録せしめられた。先生の御意図はこの目録を基礎に追加増補を行い以て将来兵庫県植物目録へ発展せしめるにあつた。

以上は先生と本県植物研究との関係を略述したのであるが、これは本県植物研究史の一時期を物語るもの

で、先生が如何に熱意を持ち御厚意を示されたかをうかがうに足る。先生は博物学会誌第20号に「兵庫県博物学会に対する希望」と題して植物調査の方途を述べられた。それを要約すると、

- (1) 植物目録担当委員をおき調査、集成の中心とすべきである。
- (2) 植物調査採集会は局部的に遍しないよう計画的に行い、反覆の機会を与えると共に新人の誘導に留意すべきである。
- (3) 各地方の篤志家に研究の便宜を与えて其の地方の精査と発表をさせるべきである。

これに関し筆者が直接拜聴したところを補足すると、目録の基礎となる標本の保存機関を設け、且つ採集家は標本を送つて標本の充実をはかり、又各郡に1, 2名の中心とする篤志家が欲しく、新人の育成の中心となると共に一般採集会は通り一遍な採集に終るものであるから溪間山頂に至るまで精査に努めることが目録を完全ならしめる要件であるとの御意向であつた。

戦争は先生の御意図を中絶せしめ、先生又他界されて再び御指導を仰ぐことは出来ないが博物学会が誕生し、各地に採集会が開かれて新人も次第に増しつゝある現状であれば、兵庫県植物の研究に示された先生の御恩顧に答える日の来ることを念願し且つ期待してやまぬ次第である。

(以上は主として兵庫県生物学会誌を参考として記した。1951年2月)

## ワカサハマギクの採集にお伴したときのこと 土 橋 忠 重

田代先生は再三但馬に來られてあれあれ同好の士を御指導下さつたがその一つ一つについてはその度毎に報告されているので改めて記すことはない。唯この稿だけは誰にも話したことがなく、又報告もしていないのでここに記して先生を偲びたいと思う。

昭和9年11月のことであつた、田代先生から「但馬海岸のワカサハマギクの分布状況を調査したい」との連絡があつた。但馬は10月をすぎると毎日毎日の雨で、朝天気と思つていても午後には雨となり、豊岡は天気であつても城崎は雨だということは珍らしいことではない。殊に11月中、下旬になれば樹々の葉は落ちて裸となり、霞のとぶのは普通で、時には積雲をみることさえあるのであるから会員を集めて採集会を催すことは困難であつた。僕はそのように先生に連絡すると「I人でもよいから調査したい」とのことであつ

た。

11月23日新嘗祭先生は京都発夜行列車で浜坂に下車された。僕と西川先生(現在大庭小学校長)とが駅頭に田迎えた。天気は曇り何時雨が降り出すかわからない空模様である。

道案内は西川先生、浜坂港を左に赤崎小学校に向つた。岸田川を渡つて部落に入る辺には路の両側にササの類が美しい葉を並べていた。

(土) これはクマザサですか、

(田) ヤネフキザサです。西川先生この辺りではこのササで屋根を葺きませんか、

(西) つかいます。山から沢山刈つてきて乾してつかいます。

田代先生は沢山とつて胴乱に入れられた。笹を車に積んで運んで来る人達に合つた。稲架には笹がかけて乾

してあつた。

岩かげには白い大きな花をつけたキクが咲いていた。

(田) これがワカサハマギクです。このキクはこの  
辺りから若狭にかけて生えています。

赤崎小学校に來た。とうとう雨が降り出した、今日は休日なので雨戸が閉つている。校庭にはところどころに水が溜つていて遊んでいる子供の姿もみえない。

(西) 天気が悪くなつてきました。ここからは久谷  
駅に近い道がありますか、

(土) どうしましょう。

(田) これ位の雨は覚悟の上ですから予定通り決行  
しましょう。

三尾部落に越える峠にかゝつた、雨は止んだ。

(土) 悪い道ですね。これ以外に道はないのです  
か、

(西) 近いうちにズイドウが作られて道は楽になる  
ときいています。

(土) これはナガバノモミヂイチゴですか、

(田) カンサイモミヂイチゴといふます。ナガバノ  
モミヂイチゴに似ていて少しちがいます。

この辺りではソヨゴの実が美しかつた。

三尾の小学校についた。教室が2つ、校長先生の外に先生2人と小使様とである。冬の波の荒い時には教室までシブキが入つてくるという。昼食をすませて、こゝで西川先生と別れる。

午後1時出発、校長先生は小使様を道案内に立て下さる。崖を登り、畑を横ぎり、田圃を過ぎ又山道を登る。1人より歩けない峠道である。左手には朝日洞門が長く海中に突出している。

(小) この辺りにはごらんの通り田圃が少くて米が  
とれません。

(土) それでは何をたべているのですか、

(小) 1年中甘藷を食べるのです。この島に夏は甘

藷を作り、冬には麦をつくります。米を食べようとするれば、他から買入れねばなりませんから容易ではありません。

(田) お米はどんな時に食べるのですか、

(土) お祭りとか、お正月とか特別の日に食べるの  
ですか、

(小) そうなんです。

大粒の雨が海から吹きつけて來た。洋傘の布目を通して飛ちるシブキは全身を濡らす、單調な道が長時間続いた。「どうしてこんな日に當つたのか」と情なくなつた。3人共黙つて歩いた。

平家の落武者で有名な余部村御崎についたのは2時半であつた。こゝで三尾の小使様には歸つてもらつた。部落を出て余部鉄橋の見える頃には雨が上つた。右手はずぐ海で、海からきり立つた岩の上に2m巾の道がつけてある。1歩誤れば助からない。この岩かげに葉の厚い、花の大きいワカサハマギクが生えていた。注意して1株、2株とつて胴乱に収めた。有名な鉄橋の下でも黙つて歩いた。ワカサハマギクはズイドウ附近にも多くあつたが何れも危険な岩かげばかりである。

田代先生と僕とは暗いズイドウを4つ通つて鐵駅に出た。

(土) よく降りましたね。今度の汽車に乗れば京都迄乗換なしで行けますら安心です。

(田) ほんとうに御苦勞様でした。やつとこれ丈言葉が出た。

汽車に乗り込んだ、胴乱を棚に上げたまゝ又話もなくウトウトとした。よくもこんなに悪い日に出遇つたものだ。夜行で來られて今日1日中歩かれた田代先生はお疲れになつたことであろう。

霰が降つてワカサハマギクの咲く頃になると何時もこの採集が思い出される。

## 田代先生の想い出

田代先生に始めてお目にかゝつたのは何年何月であつたかはつきりした記憶がないが、私が八尾中学に勤務して居た時分であるから大正12年から3年であつたと思う。田代先生は私の事を牧野先生から聞いて居られたのであろう。八尾中学へ訪ねて來られて私の所蔵腊葉を見度いと御希望であつたので、拙宅に御案内して御目に掛けたら、先生は非常に熱心に御覧になり、とても1日では見尽せないから又來ると云われ、其後何日か経て又御出になり、こんどは泊りがけで其当時私の持つていた腊葉全部に目を通されたのにはすつかり感心もし、驚きもした。私は八戸に育ち、青森にも

## 川崎正悦

6年間居り、その地方の腊葉もあるし、其後昭和4年から10年まで神奈川県と東京市に住み関東の植物も採集しているので先生に興味をひかれたものと思う。そして先生の植物分布を記されたノートに一々産地名を記入されたのであつた。それから大正15年に大阪植物同好会が再興されて先生に御指導を願うようになつてから急に先生と親しく御交際をするようになり、同年2月14日に和泉の犬鳴山に採集に行つたのを始めとして、昭和2年には室生山、岩湧山、雪彦山、生駒山、昭和4年には貴船、鞍馬、有馬から六甲、互棕池、大峰山、淡路の猪鼻谷等の採集会に参加した。先生はい

つも御元気で熱心に指導して下さった。その後も引続き大阪植物同好会の採集会も方々であつたし、昭和5年に兵庫県博物学会が創立されてからは此方でも、しばしば先生の御指導による採集会を催した。その後の事で特に印象の深いのは和歌山県博物学会の催しであつた昭和11年8月の高野山から護摩壇山の採集会であつた。この時はいつもに似ず先生が大分弱つて居られたので先生もお歳を取られたなと思つた。

先生はいつも「植物を研究する人の第一に努むべき事は、植物の名を正しく覚える事です。其事は平凡の様であるが実に大切な事です。名は実の實と云う語はよく其意を現はしたもので、名によつて其物を印象し之を記憶するのであるから、之を知るのは其の物を知る第一歩と云つてよろしい」と云つて居られた全く其

通りだと思ふ。

それから昭和3年京都で御大典の盛儀を拝した時は先生の御厚意により先生の御宅に泊めて頂いた。あの厳かな牛車が篝に映えて行進する有様は今でも願裏に鮮かに蘇える。

先生の戒名は実相院明道樹善居士と申上げる。京都大学の膳寮室に掲げてある御写真は温顔そのもので実によい写真であるが、私が七々忌に頂戴したのもいかにもこやかで今にも話しかけられそうである。先生は酒はお好きの方であつたが大した量ではなかつた。2本も飲まれると愉快になつて嬉しそうであつた。先生はいたつて身体も丈夫であつたし、まだまだ長生きをされるものと思つていたのでばつくりと御世界になつたのは実に残念である。

小・中・高を一貫せる

全科目の検定教科書

新學習指導要領準據

昭和二十七年年度発行科目

小學校用

国語・社会・算数・理科・音楽

中學校用

文学・言語・習字・社会・日本史・地図帳  
数学・理科・音楽・職業家庭・保健・英語

11  
学図

学校図書株式会社

高等學校用

文学・言語・一般社会・世界史・日本史  
人文地理・一般数学・解析Ⅰ・解析Ⅱ  
幾何・生物・地学・英語読本・英作文法

37  
好學

学図の姉妹会社  
株式会社好學社

教科書執筆者の責任編修による  
教師用指導書・ワークブック發行

東京都港区芝三田豊岡町八番地  
電話三田 5211-9番